大学評価・学位研究　第７号　平成20年３月（論文）
［独立行政法人大学評価・学位授与機構］

高等教育機関を移動する学生
―受験機会と入学実態―

Student transfers between higher education institutions: Opportunities and numbers of transfers

立石　慎治
TATEISHI Shinji

Research on Academic Degrees and University Evaluation, No. 7 (March, 2008) [the article]
National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

１．課題の設定…… 19

２．分析に用いるデータ…… 20
　2.1　データセットと変数…… 20
　2.2　編入学の全体的動向…… 21

３．受験資格から見た編入学の機会…… 22
　3.1　専門分野別にみた受験機会…… 23
　3.2　選抜度別にみた受験機会…… 24

４．編入学の状況…… 25
　4.1　専門分野別にみた編入学状況…… 25
　4.2　選抜度別にみた編入学状況…… 29

５．まとめと今後の課題…… 30

ABSTRACT…… 32

高等教育機関を移動する学生
―受験機会と入学実態―

立石　慎治*

要　旨

本稿は，日本における高等教育機関間の学生の移動について，機会の面からアプローチしたものである。各大学・学部が個別に設定している受験資格を名目的な機会として，実際に生じた編入学を実質的な機会として位置づけ，両者を専門分野および選抜度の視点から検討を行った。分析の結果，１．保健分野および高選抜度の学部を除いて名目的な機会は開かれていること，２．しかしながら，実質的な機会は各分野や選抜度別の階級で特定の学歴に偏ることが明らかになった。

キーワード

学生の移動，編入学の機会

１．課題の設定

本稿は，高等教育機関を移動する学生の学歴に着目して日本における学生の移動という現象を分析し，移動の機会における名目的な面と実際に移動が生じた実質的な面について明らかにすることを目的とする。近年，諸外国において複数の高等教育機関を移動しながら継続していく学習機会の保障が注目されている（舘編著2002）。例えば，アメリカ・カリフォルニア州のマスタープランでは，コミュニティ・カレッジによって進学困難な層に対して高等教育へアクセスする機会が保障されており，カレッジの準学士のコースからカリフォルニア大やカリフォルニア州立大学の学士課程に，あるいは学士課程間を移れることがよく知られている（例えば，三浦1991，山田2001）。アメリカの他にも，英国では各地域にある継続教育カレッジにおいて短期の高等教育課程を受講し，その学歴・資格をもとに高等教育機関における学士課程の途中年次に入学することが可能となっている（舘2002，吉本2002，吉本2003）。

我が国においても，編入学や転学，学士入学といった諸外国の例と似た制度があり，この制度に対する研究関心も生じてきている。編入学の理念や制度に関する研究としては斎藤（1982），原（1992），鈴木（2002）のものがある。また，実証的な研究としては，編入学を主題としてはいないが，短大の課程を高等教育のファーストステージとして位置づけ，その後に行われる学習であるセカンドステージとして捉えた高鳥・舘編（1998），高専卒後のキャリアの一つとして分析した日本労働研究機構（1998），保健分野における専門学校卒業生の編入学に着目した平岡他（2004）などがある。

以上が高等教育機関間を移動する学生を扱った研究だが，これまでの研究には移動する学生を統一的に捉える観点がないため，短期高等教育機関からの移動である編入学が別々に研究されてきており，また，学士課程間移動である転学や学士入学は見落とされてきているという課題がある。編入学試験の募集要項を確認すれば分かるように，ほとんどの大学・学部ではどの移動の形態であっても同じ試験の枠内で合否が決められている以上，編入学や転学といった入学形態を別々にではなく統一的に扱える視点も必要となってくる。

このような状況を受けて，吉川他（2004）によって初めて，学生の移動を「学生の流動化」として

*　広島大学高等教育研究開発センター　大学院生

統一的に扱う試みがなされた。研究グループは共通の大学分類を用いて分析を行い，メンバーである林（2004）は日本における水平移動も含めた学生の移動を初めて明らかにした。編入要件と定員設定について分類毎の分析の結果，どの分類においても「短期高等教育機関，大学双方から編入学（転学）を認める大学学部が大半」であったが，国立大学の一部や公立大学は「編入学そのものを認めていない割合が高い」こともまた明らかになっている（23頁）。また，同グループのメンバーである濱中（2007）は，大学間の転学が「いわゆる銘柄大学に集中」しており，「逆方向への移動は少ない」ことを明らかにしている。

以上の先行研究を踏まえ，本稿では日本における高等教育機関間の学生の移動に関して，とりわけ機会に焦点を当てて考察を行う。機会に焦点を当てる理由は，編入学や転学等では学生を受け入れる側の大学・学部は個々にどの学歴を取得した者を受け入れるかを決定しているため，学生にとっては取得した学歴が機会を左右する側面があるためである。先行研究では，結果としての学生の移動の量的動向が検討されているが，そもそもどれだけの機会が開かれていたかについてはあまり言及されておらず，されていたとしても後述の通り限界がある。学生の移動については，学生の実数という，結果としての機会の部分だけではなく，学部側が設定した受験の可否という，名目としての機会の部分も併せて検討する必要がある。

従って，名目としての機会を分析するためには，林論文（前掲）における短期高等教育機関からの編入と４年制大学からの転学・学士入学という集約されたかたちのパターンではなく，個別の学歴に分解する必要がある。そして，先行研究では大学の伝統（吉川他 前掲）という観点から検討されているが，本稿ではより直接的に専門分野間や選抜度ごとの違いからアプローチする。編入学では学生は何らかの専門分野の学修を経てきている点で一般入試とは異なるため専攻分野は考慮しなければならないからであり，また，学生の受け入れ行動に大学の伝統（吉川他 前掲）や「銘柄大学」（濱中 前掲）との関連があるという指摘があるが，より直接的に大学の威信を表す指標の一つである選抜性を用いて行われた分析はまだ存在していないためである。

次節からは，以上を踏まえて検討を行う。２節では分析の手法およびデータの性質を示す。３節では，学生の移動について学歴という観点から分析を行い，編入学，転学および学士入学の間にある現状ならびに性質の異同を示す。４節では，それまでの議論をまとめ，今後の課題を提示する。

（課題１）編入学の機会はどのように分布しているのか
（課題２）専攻分野および選抜度から課題１を検討したとき，どのようになっているのか
（課題３）課題１および２から，移動する学生の規模はいかに解釈できるのか

以下では編入学，転学および学士入学という呼称を適宜使用するが，それらを総称する場合には便宜的に「編入学」を用いる。実際の試験等ではまとめて編入学という呼び方をしていることが多いためである。

２．分析に用いるデータ

2.1　データセットと変数

以下の分析では，2005年度に行われた「学生の流動化と支援体制に関する調査（第２回）」によって得られたデータを用いる[1]。この調査では日本全国の2097学部を調査対象としており，1337学部の回答を得ている[2]。回収率は63.8%である。

本データセットを用いる意義は，垂直移動である編入学に加えて，水平移動である転学等も調査の対象としている点である。日本では学校基本調査が1983年度版より現在に至るまで編入学生数については調査してきているが，転学および学士入学の規模は調べられていないため水平移動に関し

[1] この調査は「学士取得過程の多様化に対応した単位認定と学士の質保証に関する日米欧の比較研究」（科学研究費補助金基盤研究（B）　研究代表：吉川裕美子教授）によって行われたものである。

[2] 但し，一部の学部については学科レベルのデータを採っているところがある。少数であること，および集約して扱うと分析結果を歪めるために分けたままとしている。

ては実態がよく分かっていない。本データセットはこの部分を議論の範囲に含めることができる。他方でデータの限界もある。一つは，編入学生の受入の多さで知られている大学・学部のうちの幾つかが未回答のため，必ずしも全国的な動向を反映していない点である。もう一つは，受験者数の情報がないため，合格率や歩留まり率が分からない点である。これは，編入学生がいない，あるいは少ない学部を解釈する際に問題となる。試験の難度が高いから編入学生が存在していないのか，合格していながら学生の選択の結果によって編入学生が存在していないのかが判別できないからである。従って，以下の議論で範囲としうるのは，編入学先として論理的に選択可能であるという意味における機会の部分と，その編入学の機会の中で実現化した部分のみである。

なお，分析に応じて本データセットにはない変数を加えている。各大学・学部の選抜度を代替する変数としての偏差値がそうで，国公立や私立，専門分野を超えて比較可能とするために朝日新聞社『大学ランキング』2006年版より採用し，補っている[3]。各学部の専門分野については，学科系統分類の大分類を用いている。用いている変数の一覧は以下の表の通りとなっている。

また，参考として，分析の視点である専門分野と選抜度階級に関して，学部数のクロス表を表２として示した。専門分野については，保健分野のみ医師養成の学科を医歯薬系，看護師養成やリハビリテーション等の領域に関する学科を看護・その他系と分けた。両者は同じ保健分野として分類されているが，前者はクロス表にも見出せるように高選抜度の学部が多く，今回は両者を別に分析を行う。

2.2　編入学の全体的動向

本題に移る前に，そもそも，どれだけの学部で編入学制度が運用され，そして実際に編入学が生じているのかという点と，今回の分析の視点である専門分野および選抜度について，学部数がどのように分布しているのかという点を確認しておく。

表１　使用する変数

	操作的定義および出典
運用状況	科研データセット
編入学生数	同上
学部数	同上
選抜度	偏差値(朝日新聞社『大学ランキング』2006年版)
専門分野	学科系統分類大分類

表２　専門分野と選抜度階級の学部数に関するクロス表

			選抜度				
			<45	45-54	55-64	65≦	合計
学科系統分類		人文科学	52	55	49	19	175
		社会科学	117	102	61	49	329
		理工農	40	79	51	22	192
	保健	医歯薬	1	5	26	90	122
		看護･その他	5	33	63	4	105
		商家教芸	34	67	38	8	147
		その他	52	61	37	18	168
		合計	301	402	325	210	1238

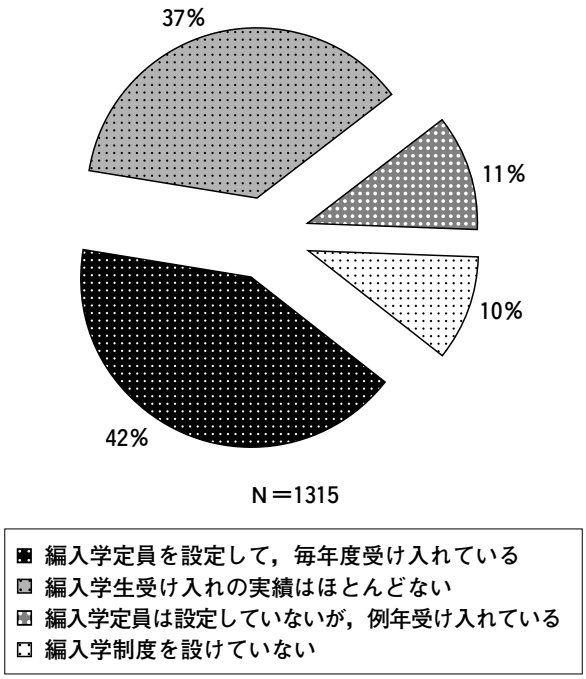

図１　編入学制度の運用状況

[3] 朝日新聞社『大学ランキング』で示されている偏差値は，2005年入試における偏差値を2004年度秋季に行われた模試より算定したものである。朝日新聞社『大学ランキング』では専門分野別や国公立および私立ごとに偏差値が記述されているが，カテゴリーの区分を超えて数値を比較することが可能となっている。
『大学ランキング』において学科毎に偏差値が算出されているものは，本データセットの単位が学部であるため，単純平均値で代替している。注１で述べたように，ケースが学科の場合は，そのまま投入した。

まず，制度の有無に関してだが，制度そのものを設けていないと回答した学部は135学部あり，全体の１割を占める。従って，編入学の受験機会がある学部は回答した学部のほぼ９割に上る[4]。そのうち，編入学制度を設けているが入学者がいないと回答している学部は144学部あり，１割を占める。よって，８割ほどの学部で編入学生がいることになる。編入学生がいる学部の中で，編入学定員が設定されている学部が554学部，定員が設定されていない学部が482学部で，それぞれ全体の４割前後を占める。

編入学定員の設定の有無に関して機会という面から見れば，編入学定員が設定されれば志望する学生にとっては毎年試験が行われ，機会が得やすくなるというメリットがあることは確かである。逆に，定員が設定されていない場合，学生にとっては合格者数などの事柄に関して定員が設定されている学部以上に見通しを立て辛いというデメリットがある。

ここで論点の一つとなるのは，定員が設定されていながら，あるいは試験が実施されていながら編入学生がいない学部の存在である。本データセットでは受験者数を訊ねていないが，市販されている編入学専門の受験情報誌等では以上のような学部が散見される。実際の受験者数，合格者数および編入学数の間に，学生の学力や選好の問題があるだろうことは，以上のような学部の存在から推測できる。但し，その点はこのデータからは解釈できないので，問題の存在を提示するに留めておく。

３．受験資格から見た編入学の機会

本節では，どの学歴取得者が受験可能となっているかという点を，専門分野別，選抜度別に見ていく。これは，編入学の機会における名目的な側面を現している。

まずは全体から確認していく。図２は，各学部において受験が可能となっている学歴の組み合わせを類型化して，個々の類型の学部数を示したものである。類型の名前は，それぞれ以下に対応した者に受験資格があることを表す。短＝短期大学卒業者，高＝高等専門学校卒業者，専＝専門学校修了者，転＝学士課程在籍者あるいは中退者，学＝学士号取得者である。

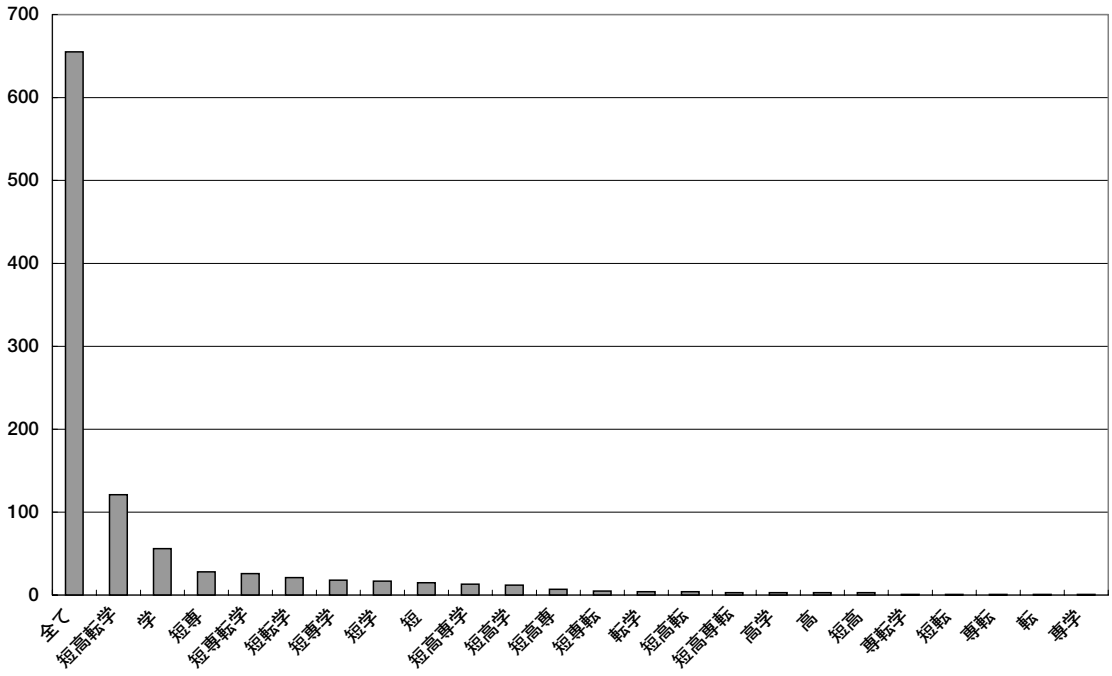

図２　各学部における受験可能な学歴の類型

[4] 但し，この値を日本の実情を表しているものとして，そのまま了解することには留保が必要である。この調査では学生の流動化を調査の主目的としているが，編入学制度がないためにそもそも回答していないという学部がデータセット内の欠損ケースに含まれている可能性があるためである。

最も多いのは，全ての学歴で受験が可能となっている学部であり，655学部に上る。これは編入学制度が設けられている学部の64%に当たる。これに続くのが，専門学校のみ受験できない学部，学士号取得者のみ受験可能な学部で，それぞれ121学部，56学部に上る。

以上のように全体から見た場合，大多数の学部でどの学歴取得者であっても受験でき，門戸は開かれているように見受けられる。これが，専門分野や選抜度という視点から眺めた際に，どのように見えるのか，以下で述べていく。

3.1　専門分野別にみた受験機会

表3は，専門分野ごとに各類型に当てはまる学部の比率を示したものである。

保健以外では，最も多いのがどの学歴でも受験が可能となっている学部であり，次に多いのは専門学校修了者のみ受験資格がない学部となっている。

保健分野は，医歯薬系では編入学制度そのものがない学部学科が過半数であり，受験機会そのものが他と比べて少ない。また，制度があったとしても学士号取得者のみが受験可能である学部が最も多く6割ほどを占める。看護・その他系では，短期大学卒業者と専門学校修了者が受験可能な学部が多い。以下に続く類型にも，短大卒業者と専門学校修了者が含まれている。両者が看護士養成を担ってきた学校種であることから，このような特徴が現れるのだと考えられる。

専門分野別の編入学機会の状況を，各学歴の学生側からどのように見えるのか確認する。学生にとっての名目的な機会は，各学歴によって受験が可能な学部の数として読み替えることができる。

図3は，各学歴によって受験が可能となる学部の階級に対する比率を示したものである。

専門分野別に見ると，保健分野の医歯薬系ではそもそも受験の機会が狭いことが明らかである。最も多いのは学士号取得者だが，それでも階級全体の4割の学部でしか受験機会がなく，それ以外の学歴取得者に至っては階級全体の1割の学部でしか受験機会がない。保健分野の看護・その他系では短大卒業者と専門学校修了者で多く受験機会があり，他の学歴取得者は2割から3割の学部に留まる。

一方で，保健を除く専門分野では，短大卒業者および学士号取得者の受験機会が最も多く，その後に高専卒業者と学士課程在籍者および中退者が続き，専門学校修了者の機会が最も少ないこともまた図から明らかである。専門学校修了者の受験機会が他の学歴取得者に比して狭まっていることに関しては，専門学校修了が編入学の基礎資格として認められてから未だ10年以下であるため受験が認められるようになる途上にあることより生じていると解釈すべきなのか，それとも安定的にこれくらいの割合で専門学校修了者に対して受験を認めない構造になっていると解釈するのが妥当なのかは現時点では判別をつけ難い。

表3　受験可能な資格の類型の比率（専門分野別）

人文科学		社会科学		理工農		保健				商家教芸		その他	
						医歯薬		看護 その他					
全て	70.3%	全て	72.7%	全て	69.4%	学	60.4%	短専	36.4%	全て	61.4%	全て	76.3%
短高転学	12.0%	短高転学	16.9%	短高転学	10.0%	全て	10.4%	全て	20.8%	短高転学	11.9%	短高転学	10.1%
短転学	3.4%	短専転学	1.9%	学	5.0%	短高転学	8.3%	短専学	14.3%	短転学	6.9%	短専転学	5.0%
短専転学	3.4%	短学	1.9%	短高学	4.4%	転学	8.3%	短専転	6.5%	短学	4.0%	短	2.9%
学	2.9%	学	1.6%	短高専学	2.5%	短学	6.3%	短専転学	5.2%	短専学	4.0%	学	2.2%
短学	2.3%	短転学	1.3%	高学	1.9%	短転学	2.1%	短高専学	5.2%	学	4.0%	短転学	1.4%
その他	5.7%	その他	3.8%	その他	6.9%	その他	4.2%	その他	11.7%	その他	7.9%	その他	2.2%
編入制度有	175	編入制度有	319	編入制度有	160	編入制度有	48	編入制度有	77	編入制度有	101	編入制度有	139
編入制度無	18	編入制度無	52	編入制度無	43	編入制度無	74	編入制度無	31	編入制度無	58	編入制度無	42
N	193	N	371	N	203	N	122	N	108	N	159	N	181

※パーセントは制度がある学部を分母とした値

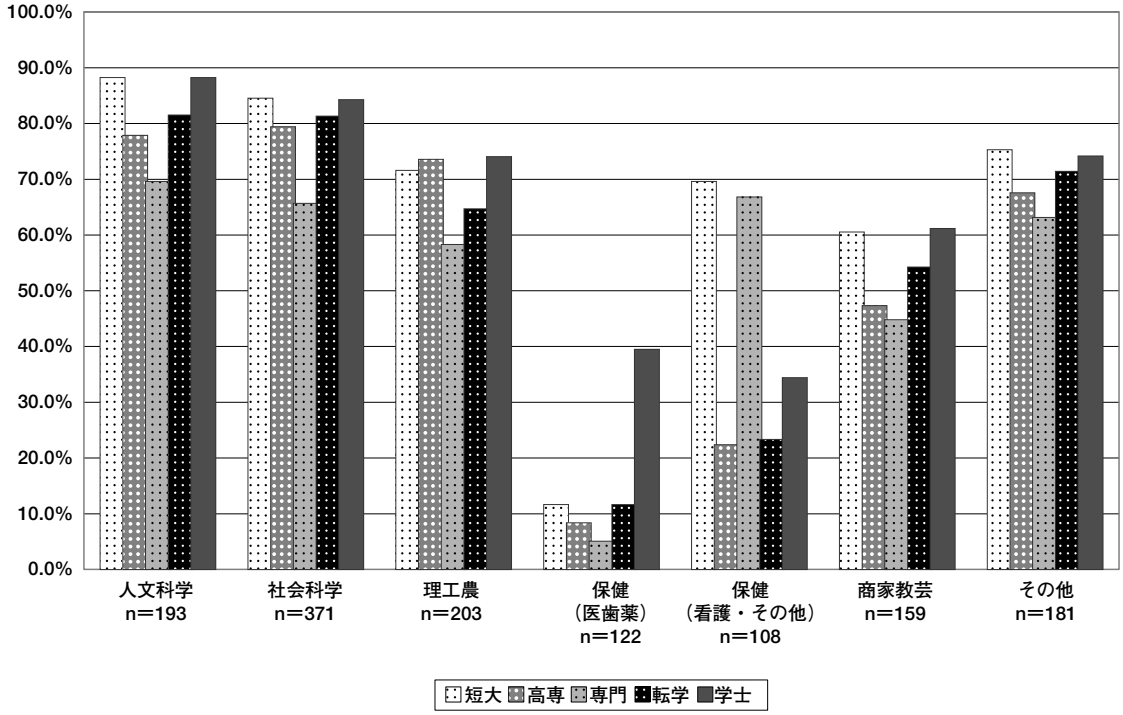

図3　各学歴で受験可能な学部の比率（専門分野別）

表4　受験可能な資格の類型の比率（選抜度別）

<45		45-54		55-64		65≦	
全て	76.7%	全て	57.5%	全て	39.7%	学	22.9%
短高転学	3.7%	短高転学	10.7%	短高転学	10.8%	短高転学	12.9%
短専転学	3.3%	短専転学	2.0%	短専	5.8%	全て	12.4%
短転学	2.0%	短専	1.7%	短専学	2.8%	短転学	2.4%
短専学	1.0%	短転学	1.5%	学	2.5%	短学	2.4%
短	1.0%	短専学	1.5%	短専転学	2.2%	短	1.4%
その他	1.3%	その他	7.7%	その他	9.8%	その他	8.1%
編入制度有	268	編入制度有	332	編入制度有	239	編入制度有	131
編入制度無	33	編入制度無	70	編入制度無	86	編入制度無	79
N	301	N	402	N	325	N	210

※パーセントは制度がある学部を分母とした値

以上より，編入学の機会を専門分野から見た場合，保健分野のみが特有の構造を有している。保健分野の看護・その他系に見られるように，特定のキャリアパスと強く結びついている領域においては受験資格によって制約されている。対照的に，保健分野以外はどの学歴であっても受験可能となっており，個々の専門分野における特徴は見出し難い。但し，専門学校修了者はその他の学歴取得者に比べて受験可能な学部が少ない。これらの結果は，保健分野と専門学校修了者を除いて，専門分野の見地からは編入学の機会が受験資格の水準で制約されているとはいえないことを示している。

3.2　選抜度別にみた受験機会

表4は，選抜度別に各類型に当てはまる学部の比率を示したものである[5]。全体の傾向から，選抜度が上がると受験の機会そのものが無くなっていくことが明らかである。偏差値65以上の階級を除

[5] 階級の設定については，偏差値であるため数値に意味があることとサンプルの分布からなるべく各階級に当てはまるサンプル数に変動が生じないこと，この両方を鑑みた上で便宜的に設定した。

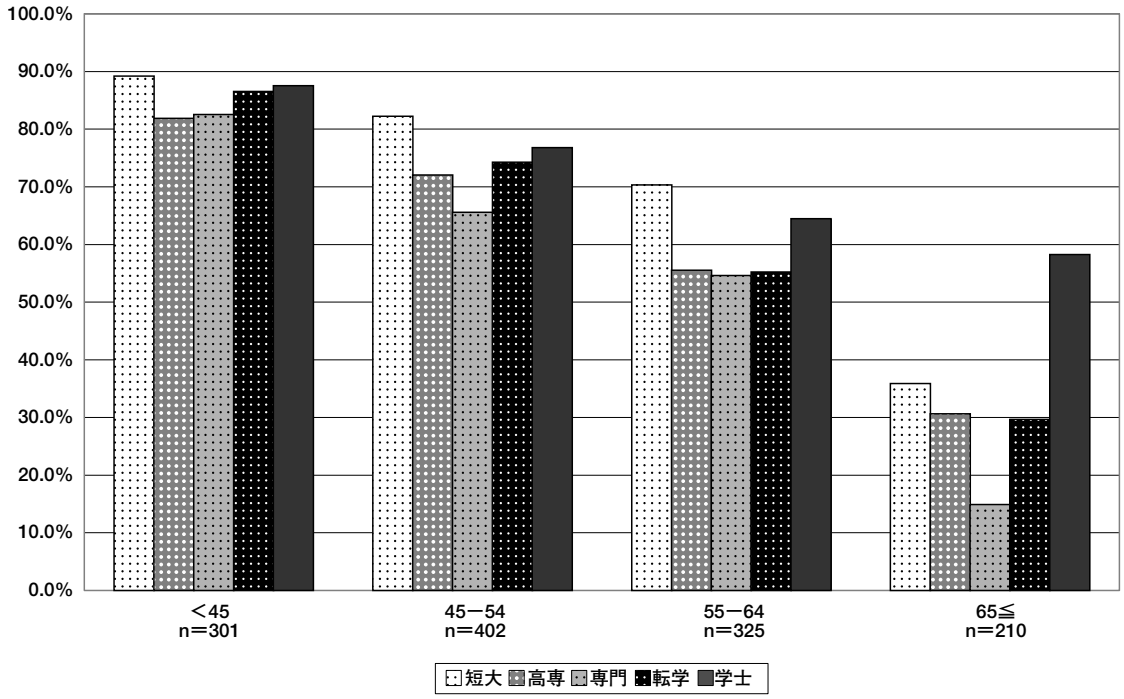

図４　各学歴で受験可能な学部の比率（偏差値階級別）

いて各階級で最も多いのは，どの学歴でも受験可能である学部となっているが，そのような学部が各階級に占める比率は選抜度が上がるに連れて減っていくこともまた読み取ることができる。偏差値65以上の階級では学士号取得者のみ受験可能な学部が最も多くなっており，他の階級と比べても異なっている。

選抜度別の編入学機会の状況を，各学歴の学生側からどのように見えるのか確認する。 図４は，各学歴を受験資格として認めている学部の階級に対する割合を示したものである。偏差値が上がるに連れて機会が狭まることは表４で確認した通りだが，学歴別に見ると，短期高等教育課程を修了した者の中でも短大卒業者は高専卒業者および専門学校修了者よりも受験可能な学部の比率が高い。また，偏差値65以上の階級の学部については，学士号取得者とそれ以外の学歴取得者の間で受験の機会に２倍から４倍の隔たりがある。

選抜度別に見ると，選抜度が高くなるに連れて機会は狭まり，同時に短期高等教育機関の卒業者，学士課程在籍者および中退した者の機会もまた狭まる。

４．編入学の状況

本節では，編入学した者の学歴の分布について専門分野別，選抜度別に見ていく。これは，編入学の機会における実質的な側面を現している。

図５に，各学部に編入学した学生の学歴の組み合わせを類型化して，個々の類型の学部数を示した。類型の名前は，それぞれ以下に対応した者が実際にいることを表す。即ち，短＝短期大学からの編入学生，高＝高等専門学校からの編入学生，専＝専門学校からの編入学生，転＝転学生，学＝学士入学生である。

受験可能な資格という点から見ると，どの学歴であっても受験可能な学部が多かったが，実際の編入学状況とは大きく異なることがわかる。個々に見れば，短大からの編入学生のみという学部が特に多く，短大および専門学校からの編入学生がいる学部が次ぎ，学士入学生しかいない学部が３番目に来ている。どの学歴でも受験が可能な学部は600学部超で最も多かったが，実際に全種類の学歴取得者が入学している学部数は40に満たない。どのような学校からも編入学できるようになっていたとしても実際に学生が移動してくるとは限らない。それでは，専門分野および選抜度という点から更にこの点を検討していく。

4.1　専門分野別にみた編入学状況

表５は，実際に編入学した学生の学歴の組み合

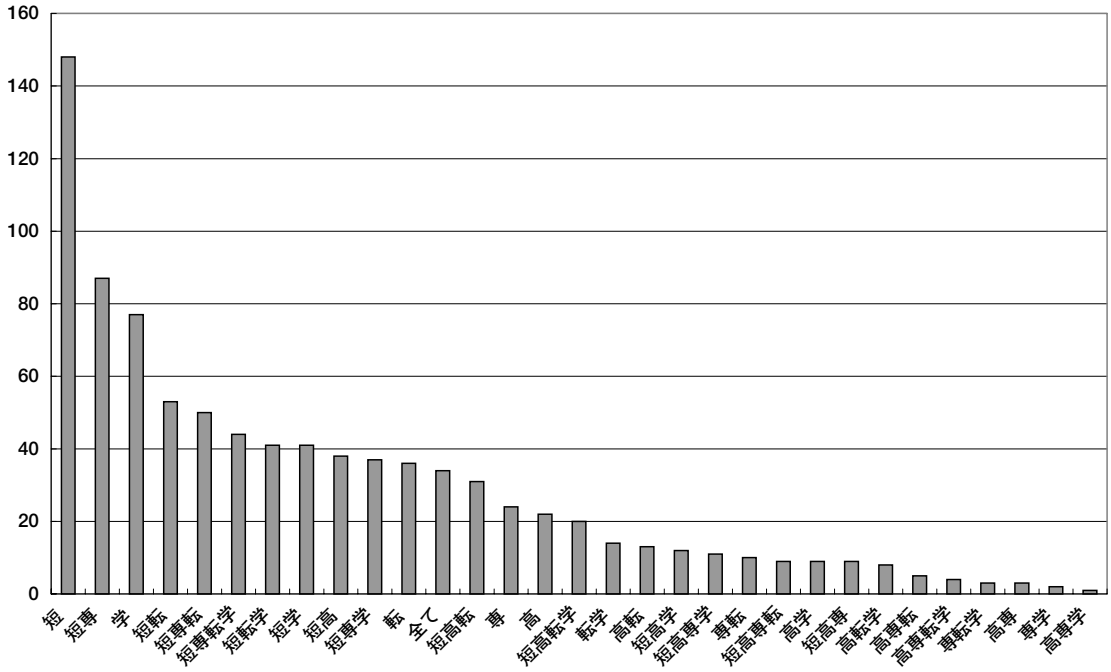

図5　編入学生の学歴による類型

表5　編入学生の学歴類型の比率（専門分野別）

人文科学		社会科学		理工農		保健				商家教芸		その他	
						医歯薬		看護・その他					
短	19.5%	短	20.4%	高	12.1%	学	87.8%	短専	59.7%	短	29.9%	短	15.5%
短転学	11.0%	短専転	9.6%	短高転	10.0%	短転学	4.1%	短高	10.4%	短学	9.2%	短専	9.3%
短専転学	10.4%	短転	9.3%	短	8.6%	転学	4.1%	短	7.5%	短専	6.9%	短専転学	7.0%
短学	7.8%	転	7.4%	高転	7.9%	転	2.0%	短専学	6.0%	短転	6.9%	短専転	7.0%
短専学	7.8%	短専	6.7%	学	7.1%	高学	2.0%	短専転学	3.0%	全て	5.7%	短学	6.2%
短転	7.1%	短学	4.4%	短高	7.1%			転学	3.0%	短専転	5.7%	短専学	6.2%
その他	36.4%	その他	42.2%	その他	47.1%			その他	10.4%	その他	35.6%	その他	48.8%
編入学生有	154	編入学生有	270	編入学生有	140	編入学生有	49	編入学生有	67	編入学生有	87	編入学生有	129
編入学生無	39	編入学生無	101	編入学生無	63	編入学生無	73	編入学生無	41	編入学生無	72	編入学生無	52
N	193	N	371	N	203	N	122	N	108	N	159	N	181

※パーセントは制度がある学部を分母とした値

わせを類型化し，専門分野別に多い類型の順に並べたものである。理工農および保健分野が他と異なり，前者は高専からの編入学生のみという学部が，後者は学士入学者のみという学部が最も多い。それ以外の分野は短大からの編入学生のみという学部が最も多いが，次に多い類型は様々である。

まず，理工農分野に着目する。短大からの編入学生のみ，学士入学者のみの学部も見受けられるが，高専からの編入学生がいる学部が上位6類型中に4つと，多く見出せる。理工農分野以外を見ると，高専からの編入学生がいる類型は保健分野に一つ見られるだけで，他分野においては見当たらない。これは他分野において高専からの編入学生がいる学部数自体が少ないことを意味する。理工農分野でも半数強の学部でどの学歴取得者であっても受験が可能であったが，結果的には高専卒業者が編入学している学部が多い。これは，専門分野のレリバンスを考えれば，整合的である。

次に，保健分野に着目する。保健分野では，学士入学者のみ，短大と専門学校からの編入学生のみという類型が大部分を占めている。前者は，学士入学のみに受験資格を認めている学部が多かっ

たことと関連していると解釈できる[6]。短大と専門学校からの編入学生のみという類型については，前述の通り，看護師養成を担ってきたのがこの二つの学校種であったことが関連していると考えられる。保健分野における受験資格と実際に入学する層は対応しており，他の分野に比べ，保健分野はいわゆる編入学のルートが確立している分野と言える。

最後に，上述の二分野以外の分野に着目する。理工農分野および保健分野以外の分野においては，殆どの学部に短大からの編入学生がいる。これは短大からの編入学が学歴別に見れば最もシェアが高いことから考えれば，妥当な結果だと言える。

以上より，実際に編入学した学生の学歴を組み合わせた類型を専門分野別に見ると，受験資格の設定および実際に編入学している学生層が対応している保健分野，どの学歴取得者でも受験は可能だが実際には高専からの編入学生が主となっている理工農分野，短大からの編入学生を中心に様々な学歴取得者が編入学しているそれ以外の分野という三つに分けて把握することができる。

これを実際の量的動向の点からも確認する。通学制と通信制を一緒にすると分布が異なってくるため，分けて示した。また，集中の度合いを示すため，質的変動係数（以下，IQV）も併せて提示している[7]。IQV は 0 から 1 の間を取り，各カテゴリーに均等に分布しているほど 1 に近くなる。あるカテゴリーに集中しているときは 0 の値を取る。従って，ある学歴や専門分野に集中していれば 0 に近づき，分散していれば 1 を示す。

図 6 は，各学歴別の編入学生数に対する専門分野ごとの編入学生数の比率を学習形態別に示したものである。即ち，学歴別にどのような専門分野に編入学しているのかを示している。図 7 は，各専門分野別の編入学生数に対する学歴ごとの編入学生数の比率を学習形態別に示したものである。即ち，専門分野別にどのような学歴取得者が編入学しているかを示している。

図 6 において通学制の学部では IQV の値を見ると，高専からの編入学生を除けば，比較的専門

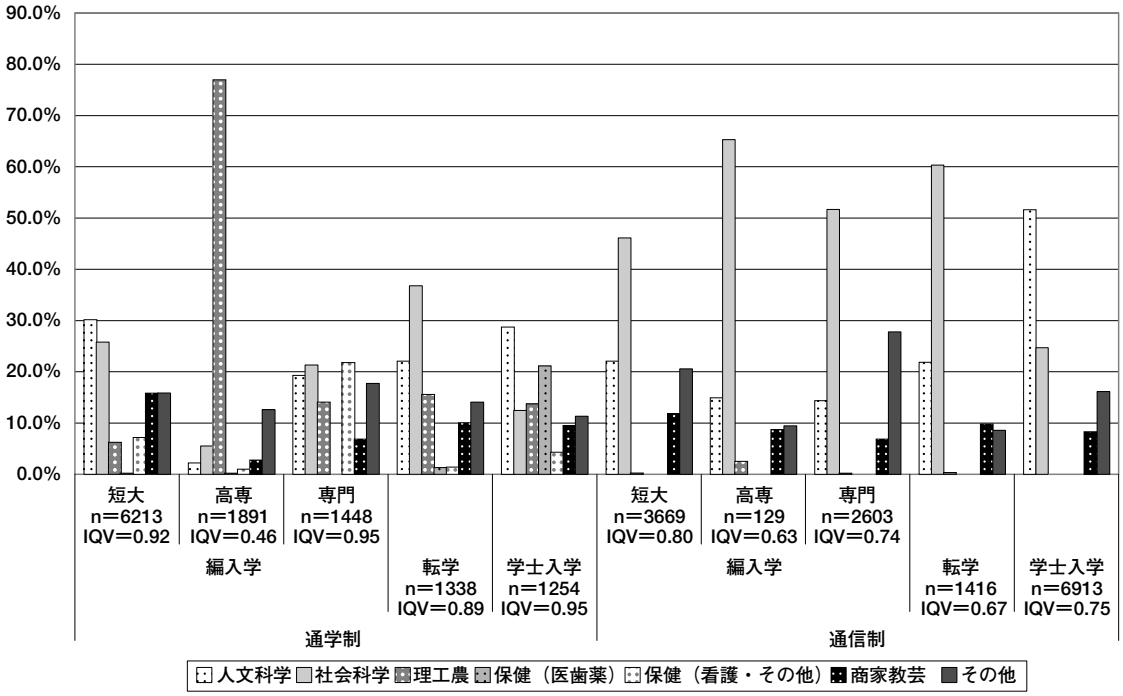

図 6　各専門分野における編入学生数の分布（出身学歴別）

[6] 実際に編入学した学生の学歴を組み合わせた類型で見たときのほうが受験資格で見たときよりも，学士入学のみの学部数が多い。これは医学科等の選抜度が高いことから結果的にこのようになっていると考えるのが妥当だろう。

[7] 質的変動係数は，変動を測る指標の一つであり，次の式で示される。

$$IQV = k/(k-1)\times(1-\Sigma\, pi^2)$$　但し，pi は i カテゴリーの比率

分野は分散していると解釈できる。ただ，それぞれの学歴において若干の差異は見られ，短大からの編入学生については人文科学や社会科学の比率が高く，理工農や保健分野の両方ともが低い。専門学校からの編入学生については，医歯薬系が０であることと商家教芸の比率が低いことを除けば均等に分散している。転学生については社会科学の比率が高く，保健分野が医歯薬系と看護・その他系の両方ともに低い。学士入学者については，人文科学および保健分野の医歯薬系が高くなっている。保健分野の看護・その他系は低い。IQV の値が低い高専からの編入学生については，一見して分かる通り，理工農分野に集中している。一方で，通信制の学部では通学制の学部に比べて若干ではあるものの，集中の度合いが高まる。通信制学部における専門分野の分布にもよっているが，短大からの編入学生，高専からの編入学生，専門学校からの編入学生，転学生は社会科学に集中しており，学士入学者は人文科学に集中している。

次に，図７において通学制の学部では，そもそも短大からの編入学生の規模が大きいこともあって，人文科学，社会科学，商家教芸，その他の分野で短大からの編入学生が５割から６割を占めている。一方で，理工農分野では６割ほどを高専からの編入学生が占めている。保健分野では，医歯薬系では９割以上を学士入学者が，看護・その他系では短大と専門学校からの編入学生がそれぞれ５割，４割を占めている。IQV の値に注目すると，保健の医歯薬系は低く，学士入学と当該分野は強固なルートが生じていることを確認することができる。通信制の学部においては，人文科学において学士入学者が占める比率が高いことを除けば，他の分野では比較的入学者の学歴は分散している。

専門分野の視点からマクロレベルで見たとき，以下のように整理できる。まず，各学歴の取得者は色々な専門分野に編入学しているが，短期高等教育機関卒業者ならびに学士課程在籍者や中退者で保健分野の医歯薬系に編入学する者はごく少ない。医歯薬系は学士入学者で多くを占められている。また，同じ保健分野でも看護・その他系は短大と専門からの編入学生で占められているため，保健分野については強固なルートができあがっている。他の分野については，６割ほどを１種類の学歴が占め，残る４割が他の学歴で構成されている。理工農分野については高専からの編入学生が，それ以外の分野では短大から編入学生が最も多くを占めている。中でも，高専卒業者は大多数が理工農分野に編入学しているため，理工農分野もルートが成立していると解釈できる。

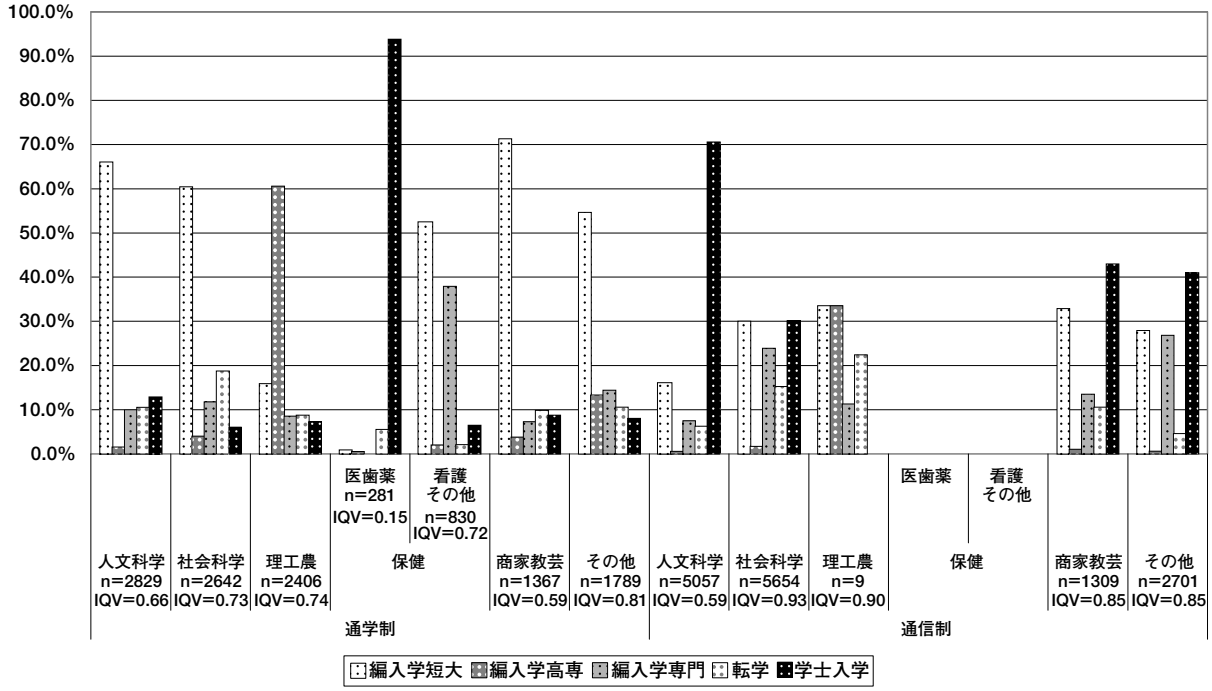

図７　出身学歴別の編入学生数の分布（専門分野別）

4.2　選抜度別にみた編入学状況

表６は，当該学部に実際に編入学した学生の学歴の組み合わせを類型化し，選抜度別に多い類型の順に並べたものである。

偏差値65以下の階級では，全ての学歴取得者あるいは４種類以上の学歴取得者が受験可能である学部が多かったが，全ての種類の学歴取得者が編入学している学部は多くない。いずれの階級でも短大のみの学部，短大および専門学校からの編入学生がいる学部が上位を占める。一方で，偏差値65以上の階級では，学士号取得者のみが受験可能な学部が多かったが，実際にも学士入学生のみが入学している学部が多数である。また，複数の学歴で受験が可能である学部もなかったわけではないが，結果としては短大からのみや高専からのみといった，一種類の学歴取得者しか編入学していない学部も見られる。

実際の量的動向にはどう現れているかを検討するために，各学歴における偏差値階級別の編入学生数の比率を図８，各選抜度階級における学歴別

表６　編入学生の学歴類型の比率（選抜度別）

<45		45-54		55-64		65≦	
短	27.3%	短	19.2%	短専	15.0%	学	42.9%
短専	11.4%	短専	10.1%	短	11.7%	短転学	7.6%
短専学	8.2%	短専転	7.7%	短転学	6.1%	転学	5.0%
短専転	6.8%	短転	7.3%	短転	6.1%	短	5.0%
短高	6.4%	短学	5.9%	転	6.1%	高	5.0%
短転	5.9%	短高転	5.2%	短専転	5.6%	短高転学	4.2%
その他	34.1%	その他	44.6%	その他	49.5%	その他	30.3%
編入学生有	220	編入学生有	287	編入学生有	214	編入学生有	119
編入学生無	81	編入学生無	115	編入学生無	111	編入学生無	91
N	301	N	402	N	325	N	210

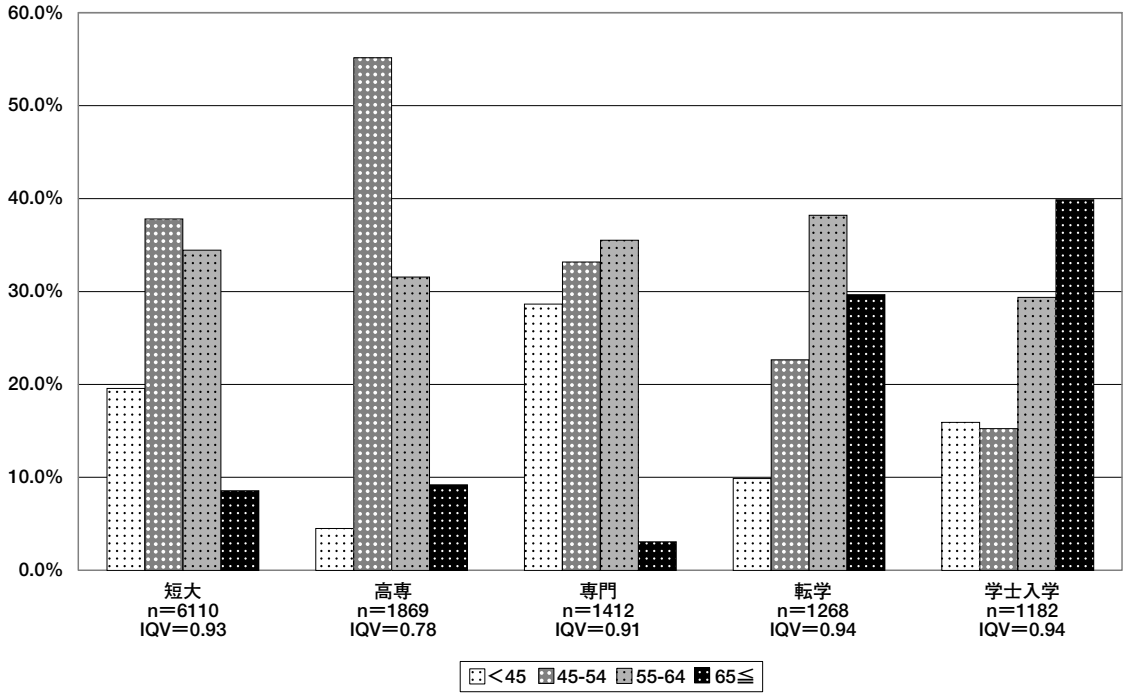

図８　偏差値階級別の編入学生数の分布（出身学歴別）

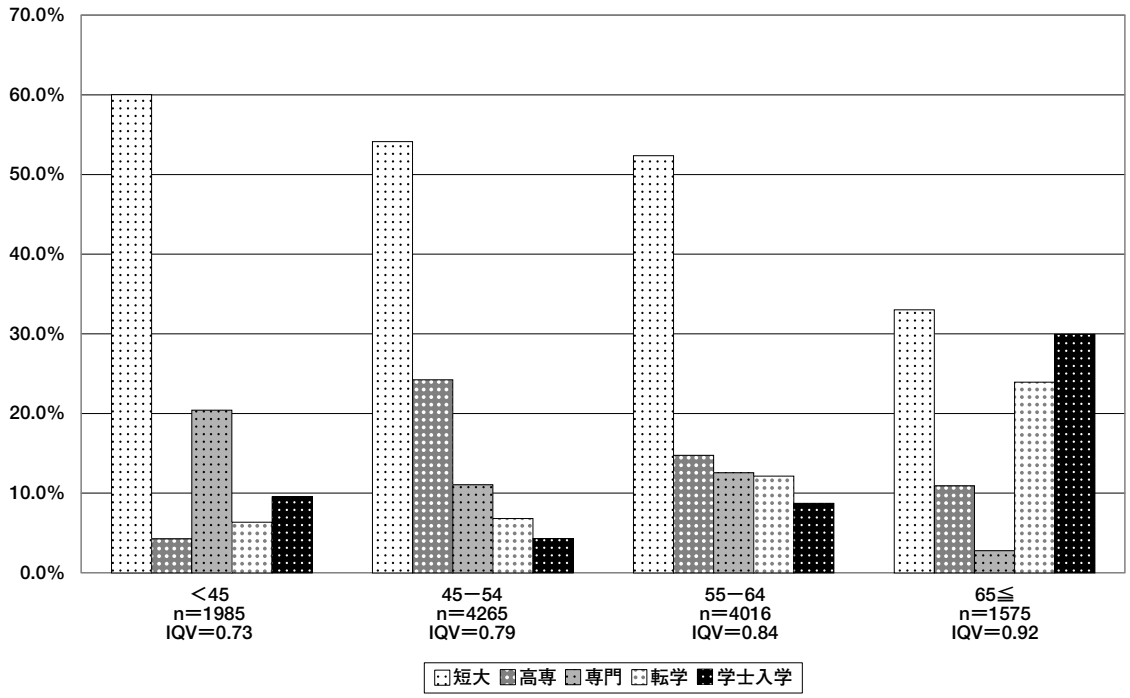

図９　出身学歴別の編入学生数の分布（偏差値階級別）

の編入学生数の比率を図９として示した[8]。

図８において，IQV は高専からの編入学生を除けば高い値を示しているが，出身の学歴ごとにどの選抜度階級に多いかは若干の差異が見られる。短期高等教育機関からの編入学生に比べて，特に学士入学者に見られるように学士課程経験者の方が高い選抜度の学部に入学していることが分かる。図９を見ると，偏差値65以上の階級において，短大からの編入学生，転学生および学士入学生がそれぞれ２割から３割を占めている。一方で，それ以外の階級では，短大からの編入学生が５割から６割を占めている。そもそも選抜度が高い学部においては専門学校修了者が受験可能な学部が少ないため，専門学校からの編入学生が少ないことは当然の結果である。しかし，高専卒業者と学士課程在籍者あるいは中退者が受験可能な学部はほぼ同じほどであったのに，実際の両者の規模は転学の方が多くなっている。選抜度を用いた場合でも，濱中（前掲）の指摘を再度確認することができる。

５．まとめと今後の課題

本稿では，編入学の名目的な機会と実質的な機会の二つを受験資格および実際の編入情況を通して概観してきた。

最初の課題に立ち戻って述べれば，どの学歴であっても受験可能な学部は確かに多い。しかしながら，専門分野や選抜度から見ると，名目的な機会は保健分野や選抜度の高い学部では特定の学歴取得者に対して絞られる傾向にあり，それ以外の学部においては広く開かれている。更に実質的な機会に目を向けると，名目的な機会が特定の層に開かれているために実際の状況も対応している保健分野や高い選抜度の学部と，名目的な機会は広く開かれていたはずだが結果としては高専や短大などの短期高等教育機関からの編入学生が多い理工農分野や低い選抜度の学部などに分かれる。分析からは名目的な機会，即ち受験資格の水準でそもそも機会がないというのは一部の分野や選抜度の学部に限られていることが明らかであり，機関が設定した受験資格を通して見れば現在の編入学の規模は受験可能かどうかというアクセスの問題ではないと言える。

従って，次に，名目的な機会としては開かれているものの実際には編入学生がいないという状況をどう捉えるかについて考える必要がある。開かれているが編入学生がいないという事態は，通信

[8]　通信制学部の偏差値は欠測値となっているため，このグラフから通信制学部は省かれている。

制学部にも編入学生が存在していることから，単純に編入学そのものに対するニーズがないということでは説明が付かない。更には，選抜度別のどの階級においても，また，どの専門分野においても編入学生がいない学部があることを併せて考えれば，濱中（前掲）の指摘の通り，機会さえ用意すれば編入するという単純な構図の問題ではないということである。今回の分析によって一部を除けば機会は開かれていることが明らかになったが，これが個人の水準においても同様に機会が開かれているとは限らない。寧ろ，今回示した機会の全体像を踏まえた上で，編入学を志望する個々人の目には機会が質と量の面でどのように見えているのかが今後の課題となるだろう。受験資格における制約の有無とはまた異なる水準で，個人がどのような基準で進学先を選択しているのか，その上でどれだけ選択肢があるのかを明らかにすることで，編入学の障壁とは何なのかがより明確になると考えられる。

現在一般的である高校からの入学に比して言えば，編入学や転学，学士入学という入学形態を利用する学生は少なく，相対的に忘れられた存在である。しかしながら，ひとたび高等教育を受けた上で更に別の高等教育機関へ移動しているという点で，従来の学生とはまた異なる，高等教育システムや個別の高等教育機関のバロメーターとなりうる。このような学生を新たに位置づけなおすこともまた我が国の高等教育の今後を考察していく上で重要な意味を持っている。

謝辞

吉川裕美子教授をはじめとする研究グループの皆様には，本稿で使用させて頂いたデータや研究会でのコメント等，多岐に渡って色々な援助を頂きました。深く感謝申し上げます。また，広島大学の小方直幸准教授と村澤昌崇准教授にも本論文にコメントを頂きました。ありがとうございました。

参考文献

朝日新聞社　2005『大学ランキング2006年版』朝日新聞社.

斎藤諦淳　1982『開かれた大学へ―大学の開放及び大学教育改革の進展―』ぎょうせい.

鈴木克夫　2002「高等教育機関における編入学制度の考察」,『日本生涯教育学会論集23』, 日本生涯教育学会，平成14年７月，pp.53-60

高鳥正夫・舘昭 編著　1998『短大ファーストステージ論』東信堂.

舘昭 編著　2002『短大からコミュニティ・カレッジへ』東信堂.

舘昭　2002「イギリスの短期高等教育の拡大と強化策」『短大からコミュニティ・カレッジへ』, 東信堂，13-34頁.

日本労働研究機構　1998『高専卒業者のキャリアと高専教育』調査研究報告書 No.116, 1-261頁.

濱中義隆　2007「編入学・転学のマクロな動向」日本高等教育学会第10回大会課題研究Ⅰ報告資料，1-6頁.

林未央　2004「２．量的側面から見た編入学の動向」吉川裕美子，濱中義隆，林未央，小林雅之　2004「学生の流動化と学士課程教育―全国大学調査にみる編入学，単位認定，学生交流と支援体制の実態―」『学位研究』第18号，11-29頁.

原一雄　1992「編入制度の基本原理と運用上の障壁」『一般教育学会誌』第14巻第２号，10-13頁.

平岡敬子，山内京子，岩本由美　2004「専門学校卒業者の編入学の目的と満足度に関する意識調査」『看護学統合研究』Vol.5 No.2，1-5頁.

三浦嘉久　1991『コミュニティ・カレッジ論』高文堂.

山田礼子　2001「アメリカの高等教育における単位互換と単位の認定―カリフォルニア州のアーティキュレーション・システム―」『学位研究』第14号，3-28頁.

吉川裕美子，濱中義隆，林未央，小林雅之　2004「学生の流動化と学士課程教育―全国大学調査にみる編入学，単位認定，学生交流と支援体制の実態―」『学位研究』第18号，1-104頁.

吉本圭一　2002「スコットランドにおけるカレッジの挑戦」『短大からコミュニティ・カレッジへ』，東信堂，35-56頁.

吉本圭一　2003「スコットランドにおける短期高等教育を含めた資格制度と多様な学習経路の設計」『学位研究』第17号，51-68頁.

（受稿日　平成19年11月１日）

[ABSTRACT]

Student transfers between higher education institutions: Opportunities and numbers of transfers

TATEISHI Shinji *

In this paper, the author discusses opportunities for student transfers and the number of students actually transferring in Japan. In terms of fields of specialty and selection criteria, the following can be said about opportunities and the number of students actually transferring.

- In the field of health alone, graduates from universities, *Tanki Daigaku* (junior colleges) and *Senmon Gakkō* (vocational colleges) have opportunities to transfer to different universities and colleges.
- In cases of high selection criteria, only university graduates have opportunities to transfer to different universities and colleges.
- In other fields and selection criteria, the number of students transferring from *Tanki Daigaku* is high while that from other types of institution is low, although universities and colleges do not limit opportunities.

* Graduate Student, Graduate School of Education, HIROSHIMA University